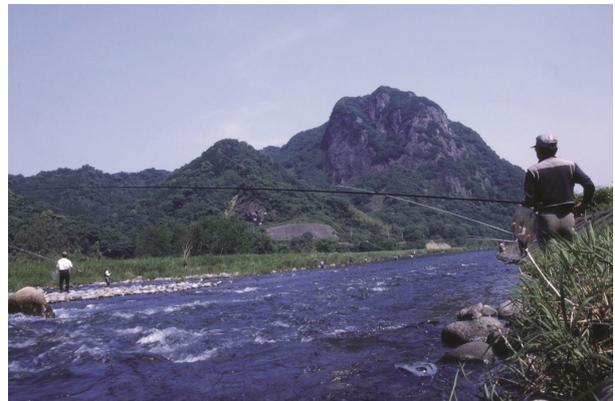


2 狩野川をめぐる祭と信仰にみる歴史的風致

伊豆の国市の平野部中央を北流する狩野川は、古来より、人々の暮らしと密接に結びついている。農業用水として、流域の田畑を潤してきたのはもちろん、陸上交通の整備が進むまでは、舟運による輸送経路として、重要な役割を果たしてきた。鎌倉幕府の執権北条氏の館(史跡北条氏邸跡・円成寺跡)が、狩野川に臨む守山の麓に営まれたのも、交通路としての狩野川の重要性によるところが大きいと考えられる。江戸時代には、河口の沼津港から狩野川各所に設けられた河岸を結ぶ、物流のネットワークが形成されていた。



狩野川での鮎釣り

また、鮎などの漁場(狩野川は鮎の友釣り発祥の地として知られる)として、今日まで豊かな恩恵をもたらしている。しかしその一方で、たび重なる洪水によって、流域に甚大な被害を与えてきたことも事実である。

流域に暮らす人々にとって狩野川は、その支流も含めて、日々の生活に密着した親しみ深い存在であると同時に、深刻な被害をもたらす暴れ川として畏怖される存在でもあった。そのため、長年にわたって治水・利水のための努力が積み重ねられてきた。そして、「かわかんじょう」等の祭や慰霊祭などを通じて、水害を避け、水難者を慰霊しようという習俗が生まれ、現代まで継承されてきたのである。

(1) 狩野川をめぐる祭と信仰にみる歴史的風致を構成する建造物

①八坂神社

狩野川右岸の四日町地区の鎮守である八坂神社には、須佐之男命すきののおのみことと奇稲田姫命くしなだひめのみことの二柱とともに牛頭天王ごずてんのうが祀られている。寄棟造銅板葺の拝殿おおいやと覆屋があり、覆屋の中に江戸時代後期のものとみられる流造の本殿を納める。また、末社として境内に大山祇神社おおやまつみが祀られている。



八坂神社

牛頭天王については、正長元年(1428)に起きた「酉の満水」と呼ばれる洪水の時、狩野川上流の梅木村(現伊豆市)から

ご神体の木像が四日町に漂着し、それを祀ったという伝承がある。ご神体が流れ着いたとされる場所は、八坂神社から道をはさんだ向かい側にあり、現在も「降臨の地」として大切にされ、お天王さんの際に神輿が渡御する、お旅所となっている。

②守山八幡宮

守山八幡宮は、狩野川右岸の寺家地区の鎮守である。隣村であるにもかかわらず、八坂神社でお天王さんが行われる際、八坂神社の神輿が渡御することで知られている。祭神は菅田別命・大山祇命・木花開耶姫命の三柱である。切妻造平入銅板葺の拝殿と覆屋を持つ。守山八幡宮の宮司である榎家に伝来する『守山八幡宮記録抄』には、当社の本殿は、寛永 9 年(1632)に久能山東照宮祭主榊原照久が造営したとある。



守山八幡宮

③神益麻志神社

狩野川左岸の神島地区の鎮守である神益麻志神社の境内は、長年にわたって後述する「かわかんじょう」で用いられる筏の材料となる藁縄を作る場所となっていた。祭神は長白羽命他四柱である。入母屋造平入銅板葺の拝殿と覆屋があり、流造の本殿を納める。天保 13 年(1842)の棟札が伝来している。



神益麻志神社

④狩野川水害慰霊碑

昭和 33 年(1958) 9 月の狩野川台風は、1,040 人にのぼる死者・行方不明者を出し、流域に甚大な被害をもたらした。あまりにも大きかった狩野川台風の打撃から人々が立ち上がり、日々の生活を取り戻していく過程では、流失した家屋の建て直し、道路や橋などの交通網の復旧、泥に埋まった田畑の復活などとともに、亡くなった人々への慰霊の営みが必要であった。そして、それを顕す形あるものとして、川沿いの各所に慰霊碑が建立された。

表 2-2-1 狩野川台風による被害状況(伊豆の国市内)

自治体名(当時)	死者	負傷	行方不明	全潰	半潰	流失	床上浸水	床下浸水
韮山町	66	212	2	50	206	128	874	68
伊豆長岡町	2	26		4	20	3	618	115
大仁町	202	236	18	41	71	147	179	312

1 表 2-2-2 狩野川台風等水難者慰霊碑

地域	地区	場 所	名 称	建立年
韮山町 (当時)	南條	千歳橋東側	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 49 年 9 月 (1974)
伊豆長岡町 (当時)	北江間	函南町日守へ続く道沿い	狩野川台風殉難供養塔	不明
	堀之上	菖蒲橋北側	久保田豊胸像	昭和 42 年 10 月 (1967)
		菖蒲橋北側	狩野川放水路竣工記念碑	昭和 40 年 7 月 (1965)
大仁町 (当時)	神島	神島橋西側	狩野川外諸川水死招魂碑	明治 39 年 (1906)
	田京	広瀬神社北側下田街道沿い	田中村洪水殉難者供養塔 (深沢川)	大正 10 年 (1921)
	白山堂	白山神社参道	狩野川台風殉難者供養塔	昭和 37 年 8 月 (1962)
	御門	御門公民館横	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 39 年彼岸 (1964)
	中島	中島公民館近く	狩野川台風殉難者慰霊碑	昭和 39 年 9 月 (1964)
	大仁	大仁橋北側	狩野川水死者供養塔	大正 4 年 (1915)

資料：伊豆碑文集

3 図 2-2-1 狩野川水害慰霊碑および関連石碑等位置図



1 (2) 八坂神社のお天王さん

2 八坂神社では、毎年7月中旬の日曜日に「お天王さん」という祭が、四日町地区に住む
3 同社の氏子によって営まれている。この祭の創始年代は詳らかでないが、大正7年(1918)
4 刊行の『静岡県田方郡誌』に「^{たがたくん}菑山村四日町の天王祭は、最も有名にして、附近より群集
5 する者多し」と記されており、この頃既に盛大な祭としてよく知られていたことがわかる。

6 お天王さんには、疫病退散と風水害避けの霊験があると言われており、毎年御殿場から
7 参詣する講もあったという。またこの祭では、四日町地区内のみならず、寺家の守山八幡
8 宮及び宮司^{まき}榎家邸内に祀られた御幣王子社にも神輿が渡御する。祭では、神輿の出発に先
9 立ち、担ぎ手たちの禊ぎが行われる。かつては、狩野川の流れに入って身を清めていたが、
10 近年では氏子総代が手桶の水を笹の葉で担ぎ手たちにかけるという形となっている。

11 お清めの後、2基の神輿(祭神である^{すきのおのみこと}須佐之男命と^{くしなだひめのみこと}奇稲田姫命)は、行列を組んで八坂
12 神社を出発する。太鼓と金棒、天狗を先頭として、御幣・錦旗・唐櫃等の諸役、神職・神
13 輿が続き、最後尾を神社総代や地区の役員などが続く。行列は、まず下田街道(国道136
14 号)を挟んで神社の向かい側にある「神降臨の地」に向かい、そこで祭典を行う。その後、
15 四日町地区内を南下して寺家地区に向かう。神輿の通り道には、御神酒等のお供えを持っ
16 た地区の人々が出て、行列を出迎える。

17 八坂神社の神輿は、寺家地区では守山八幡宮と、同八幡宮の宮司家である榎家敷地内に



八坂神社



お天王さん 八坂神社を出発



守山八幡宮での祈禱



牛頭天王 降臨の地



神輿の通り道にお供えを持った地域の人々が出ている

1 鎮座する御幣王子社みてぐらのおうじに渡御する。守山八幡宮にて奉幣した後、神輿みてぐらのおうじは御幣王子社に向かう。
 2 御幣王子社では、八坂神社の神職から、守山八幡宮の宮司へと御幣を受け渡す儀式が行われ
 3 れる。その後、神輿は旧下田街道を北上して八坂神社に還御する。

4 八坂神社の神輿が渡御する守山八幡宮は、狩野川本流と支流の葦山古川の合流地点に位
 5 置する守山の中腹に鎮座しているが、洪水で流れ着いたとされる八坂神社の神が、狩野川
 6 に臨む守山に渡御するのは、水難を避けようとする人々の祈りの現れであるとも言えよう。

8 図 2-2-2 お天王さん 風致範囲の拡大図

